

## 貴重な経文の保護を起源とする表装

### 茶の湯の文化と共に発展

活け花や見事な表装が施された掛軸で飾られた部屋は心落ち着く空間です。表装には書や絵を壁にかけやすくするという機能面もありますが、それ以上に作品のもつ価値を引き出す役割をもっています。

表装は芸術作品をよりよいものとして仕上げるためにおこなわれていますが、もともとは貴重な経文を修復、保護するための技術として中国で生まれ、奈良時代に日本へ伝わったとされています。そして寺院の多い京都で発達しました。こうした歴史があるため、表具師は経師屋きょうじと呼ばれることもあります。表装をする事で折目や汚れを防ぐことができるため、平安時代になると絵巻物の保護や装飾もおこなわれるようになっていきます。

さらに襖や屏風、障子といったものにも表装の技術が応用されていきます。安土桃山時代に千利休によって茶の湯が完成し、独自の様式の茶室が作られるようになると、掛軸が茶室の中で重要な要素をもつようになってきます。そして表具師が掛軸の製作をおこない、技法や形式も整っていきました。

### 文化財保護にも欠かせない伝統の技術



明治時代になると掛軸だけではなく、日本画などの芸術作品の表装をおこなうなど、表具師の仕事は広がります。明治44年には表具師の組合がつくられていたといわれています。大正時代には表装の展覧会である「表展」を開催するようになりました。



洋風の住まいや暮らし方は表具師にもインテリアとしての仕事求められるようになってきます。一方で貴重な文化財の修復には表具師の伝統の技が欠かせません。そうした技をきちんと継承していくため、表具組合から独立する形で昭和47年に名古屋表装文化協会が設立され、「表展」も受け継ぎました。しかし仕事自体が減少していく中で、廃業を余儀なくされる人もいて、「表展」は惜しくも平成20年に開催した第79回から休会することになりました。

それでも名古屋城の本丸御殿の襖の復元には名古屋表装文化協会の有志が活躍しています。また、メディアが主催する文化教室にも表装の講座が開かれ、書や絵の心得のある人達が受講しています。

#### DATA ■名古屋表装文化協会

所在地：千種区千種一丁目6-12 遠月堂内

- ・明治44年：名古屋に表具師の組合を設立
- ・大正末期頃：第1回「表展」開催
- ・昭和47年：名古屋表装文化協会設立
- ・平成20年：第79回「表展」開催、以後休会